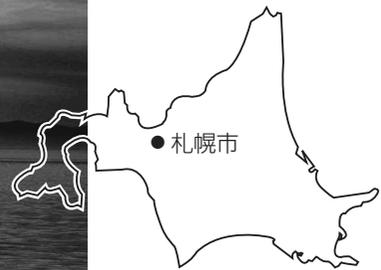


●「北海道の学校事務」の現在・過去・未来



〈第 1 回〉



北海道の学校事務

「おはようございます!」。元気なあいさつが響き合うある日の朝、校舎前での出来事です。4年生の児童が私に近づき、こう尋ねてきました。「北野さん! 先週学校で姿が見えなかったけど、何かあったのですか?」。

唐突な質問に多少戸惑ったものの、「仕事で稚内に行っていたんだよ。どうして?」と逆に尋ねると、「良かった〜。病気にでもなったのかなと思って……」。その子が照れくさそうに笑いました。

私は前の週、稚内市で開催された第58回北海道公立小中学校学校事務研究大会（以下、全道事務研）に参加していたため、2日間学校を留守にしていたのです。

大会の主催は北海道公立小中学校学校事務職員協議会（以下、全道協議会）。会員総数1,300名を擁し、現在では「当たり前」のように存在するこの団体が、「当たり前」のように年に一度研究大会を開催し、「当たり前」のように全道各地から多くの会員が参加しています。しかしこの「当たり前」は、決して最初から「当たり前」ではなかったのです。

公立小中学校に学校事務職員が配置になって間もない1951年に全道協議会が設立され、全道事務研の第1回室蘭大会が開催されました。以来、年1回の研究大会を58年にわたり、幾多の困難を乗り越えながら継続してきました。全道事務研を継続してきたからこそ、現在の「北海道の学校事務」が息づいていると言っても過言ではありません。

私をはじめ全道事務研に参加したのは、第42回後志大会です。駆け出しの学校事務職員だった私に、大会が持つ目的や意義などわかるはずもなく、先輩方に連れられるがまま、気軽な旅行気分で大会に参加しました。

当時は教職員定数の第6次定数改善により、学校事務職員の配置基準が大幅に引き下げられた時期であり、「経験年数の少ない事務職員のために」という分科会が設定されていました。その分科会に参加はしたものの、何の問題意識も持たず最後列に座り、半ば「上の空」で分科会の論議を聞いていました。このような気持ちで参加していたため、論議の中身についての記憶は定

かではありませんが、同世代が「学校事務」に対し、熱い思いを込める言葉の数々にショックを受け、自分の無知や意識の低さを思い知らされたことだけは今でもはっきりと覚えています。

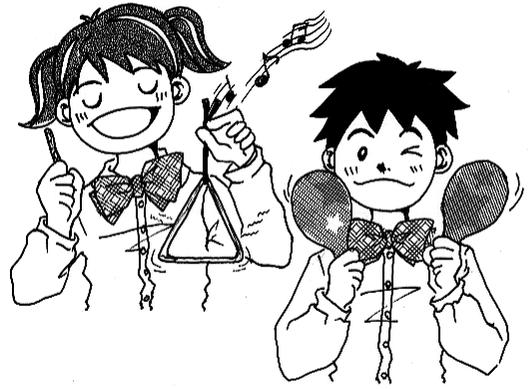
あれから十数年、昨年とある研修会に参加するため、後志大会の開催地だった倶知安町を訪れる機会がありました。倶知安駅に降り立った私の目に映ったのは、蝦夷富士と称される名山「羊蹄山」の初雪をまとった素晴らしい美しさと、圧倒されるような雄大さでした。あまりある感動と同時に、私にはこの絶景の記憶が、まったく無いことが不思議でなりませんでした。

きっとあの頃の私は、仕事に対して誇りや自信を持つことができず、小さな悩みを抱えながら、肩を落として下ばかり向いて歩いていたのだと思い、研修会の中で思い切ってそのことを話すと、当時の大会実行委員だった方がそっと私に教えてくれました。

「あの時はね、二日間とも雨で羊蹄山は見えなかったんだよ」――。

第25回千歳大会の持田栄一^{*1}氏の講演「教育としての学校事務を問いかえす」を拠りどころに研究をすすめた北海道の学校事務職員は、実践する中から「領域としての学校事務」を構築してきました。その後も集団的研究・実践の試みは今日まで続き、その過程では常に「学校づくり」に努め、正面から子どもに向き合ってきました。

第50回旭川大会で分科会の記録係を担当しました。学校事務職員として、仕事のおもしろさをはじめとして、さまざまなことをやっと理解できるようになった時期であり、記録をとりながらも、分科会の論議に強く引き込まれていく自分がいました。



分科会の中で、助言者の北海道教育委員会の職員が「私も十数年前は皆さんと同じ公立小中学校の事務職員でした。あの当ても『領域』に関する論議を重ねていましたが、今でもまだこうやって研究を続けているのですね」と懐かしそうに発言をしました。私はこの発言を聞き、「領域」の実践・検証が永年にわたり継続されていることに誇りを感じるとともに、「領域」が教育行政機関をはじめとし、学校外の人間に未だ理解されていないもどかしさも抱きました。

そしてもう一人の助言者だった学校事務職員が「『学校づくり』のためには、子どもとともに生きていることを意識することが大切です。私たちの職の本質はさまざまな制度が変わっても不変でしょう。これまで同様みんなで『学校づくり』に邁進しましょう」と力強く発言をしました。この発言に私は、これまで同様これからも行政系列に入ることなく、「学校に居てこそ」の現場の視点を大切にしなければならないという気持ちを強く持つようになりました。

決して考え方がきちんと整理されたわけではありませんでしたが、漠然とはしながらも行政職員と学校事務職員の違いを感じながら、新しい一歩を踏み出す必要性を抱いた出来事でした。

研究大会の帰り道、少しだけあごを上げ、胸をはって歩く自分がいました。



〈イラスト〉 村山悠子
(大空町立東藻琴中学校教諭)

現在、北海道においては、「領域」を深化・発展させる「学校間連携」のとりくみをすすめています。これは、学校事務職員の相互交流により学校事務の課題を共有化し、相互連携をして課題解決していくというものであり、「子どもや全教職員、保護者、地域住民との協力協働による学校づくり・地域づくり」へ発展させることを展望するものです。

第58回宗谷大会が今年の9月、稚内市で行われました。永年にわたり、私たちの実践に示唆を与え続けてくれた旭川大学学長の山内亮史氏の講演をはじめとし、講座「学校間連携」など4つの分科会に分かれ、熱心な討議が行われました。

そんな中、とりたててこれといった実践も行っておらず、知識も経験も持ち合わせていない私が、身分不相応の分科会役員を任されました。過去の資料を必死に読みあさり、その場しのぎにも似た「やっつけ仕事」で、大学ノートに何ページも「気の利いた」コメントを書きながら、当日の分科会にのぞみました。

「子どもの目線にたち……」。「教職員の協力協働をもとに……」。「学校づくりを意識し……」。私の心に、分科会の中で参加者が発する言葉の一つひとつが突き刺さりました。なぜならば、その言葉は実践やと

りくみを本気ですすめているからこそ発することができる言葉であり、みんなの労苦や思い、願いが込められている言葉だからです。私は分科会の最後に、これといった実践やとりくみを披露できず、上辺だけの言葉を繰り返した自分の愚かさを素直に詫言びました。これがあの日唯一の私の発した偽らざる言葉でした。

そしてこの時、前日に行われた開会式での会長あいさつをふと思い出しました。「学校事務職員制度発足直後、わずかな配置定数と不明確な位置づけの中、創生期の本会活動に奔走された人たちがいます。このような苦労のおかげで、58回にもおよぶ研究大会が継続されています。諸先輩が残してくれた足跡を引き継ぎ、研究大会をはじめとした諸活動の発展に努めていくことを、みんなで確かめ合いましょう」――。

これも、私に向けられていた言葉と受けとめながら、あらためて言葉が持つ重みを胸に刻むのでした。

「ごめんね心配かけて。研究会でたくさん勉強してきたんだよ」と、質問をしてきた4年生の児童に話すと、「おとなになっても勉強するなんて大変ですね。がんばってください!」と励まされてしまいました。

このように、児童生徒は学校事務職員に対して、教員と何ら分け隔てなく、平等に接してきます。それは、職員はもちろんのこと、保護者や地域の多くの人達も一緒です。

これも決して「当たり前」のことではなく、先人が幾年にもわたり、労苦を重ねながら、職員はもとより、児童生徒、保護者や地域としっかり寄り添い、結びつきながら学校事務をすすめてきた賜物です。そしてこれこそ「領域としての学校事務」が、

人と人を切り結びながら脈々と受け継がれている証に他ならないのです。
校庭にチャイムが鳴り響きました。私に

向かって大きく手を振り、急いで校舎へ入って行くその児童の後ろ姿を見つめながら、そう思わずにはいられませんでした。

会長あいさつ || 名達 和俊

北海道公立小中学校事務職員協議会長
(北海道北見市立光西中学校事務職員)



北の大地に生きる私たちには開拓者精神が生き続けています。その核心はどのような環境・状況にあっても自らが進むべき道を切り拓くことにあります。凍てつく厳しい冬を耐え、やがて雪に覆われた大地から硬い蕾が芽吹くように。

北海道の先達は学校事務の確立にむけて「領域としての学校事務」を提起しました。これは東京大学教授・故持田栄一氏の「教育としての学校事務を問いかえす」と題した講演が基礎にあります。学校は子どもたちにとって「生活の場」と捉え、そのための「学校づくり」に視点をおいた考え方です。

学校事務の役割は教職員・子どもたち・保護者等との連帯を創り出し、「子どもたちの生きる場所」としての学校を築くことにあります。この協力・協働の関係性が「学校間連携」に発展することは必然といえます。もちろん学校事務には二面性があり、学校づくりと事務処理が存在します。公教育が問われているいま、学校事務をとおして発信すべきは「学校づくり」にあると断言するのは北の大地に生きる証なのかもしれません。全事研には組織的に加盟していない北海道から、ちょっと新鮮に映る学校事務の発信です。

一年間「北海道の学校事務」にお付き合いいただければ幸いです。

*1 1925年生まれ。東京大学教授。東京帝国大学文学部教育学科卒、専攻は教育学・教育行政学。民主教育の理論的指導者として、早くからその名を知られ、著書に『教育管理』（1961年、国土社）などがある。学校で働く人たちの問題に強い関心を持ち、日教組全国学校事務研究集会開催にも尽力された。全道事務研究大会では第12回函館大会でも講演されている。1978年逝去。

〈参考文献〉

- 北海道公立小中学校事務職員協議会 アーカイブス
／北海道公立小中学校事務職員協議会ホームページ
(<http://www.gakkoujimu.jp>)
- 第50回大会記念誌 北響（協議会誌 第5集）
／北海道公立小中学校事務職員協議会編（2000年）
- 北海道の学校事務 ―深化・発展する領域―
／北海道公立小中学校事務職員協議会編（2006年）
- 北海道の学校事務 ―第2集―
／北海道公立小中学校事務職員協議会編（2008年）

